

聞き帆走る船の船足甚だ緩く、江傳に漕ぎ行く様の面白く、

帆から船山形にのる須磨の風。

須磨寺山腹にありて稍小高き處ある石級の下若木の櫻三株あり、年を経れば從て枯を又從て新芽を生じ決して老木とあらぬ由あり。寺いと古びて修めず庭内荒涼たり、熊谷が敦盛の首包と云ふ小袖、敦盛の命をとつた青葉の笛など其外種々あり。辨慶が『此花江南』の制札面白ければ石摺買はんと云ふれどなし。こゝを出でゝは道山手に沿ふて海邊を遠かり景色見るべきものなし。光源氏の舊蹟と云ふ標せし寺ありしかを見ず。兵庫より稍手前に平知章が墓あり、高さ一尺餘傍に大なる標石立つ。嗚呼平氏閭族中、眞に婦女輩に非るもの果して幾人、新中納言文子實に見るべきもの、而して知章身を棄てゝ父を脱せしむ、勇まして孝ある好少年埋没して顯れず、蓋し私闘の故あるか。急がぬ道と思ひ餘りに寛々したる爲、神戸に入りたる時は夕陽早や山の端に暮く頃となりぬ。初めは布引、生田迄もと思ひしも今は見殘さでは叶はず止にしぬ。湊川街路より高さ幾十尺和蘭の川も忍ばるゝ程あり、剩へ水と云ふは一滴もなく、川底には砂一面にして掃目見ん斗り、土俗「徒すると川へほり上るぞ」と小供を叱る由あれど、それは餘りあるべし。夜流車にて再び大坂の地にかへる、月黒くして眺めもなく、行きがけに反對に乘客誠に少かりしかば、腰掛にひつくりかへりてぐすり寝込、幾回か流笛よ驚かされて目を醒し、梅田にて下りたるときは八時過あり。これより先は利に驅られ慾に迫はれ、東西南北にかけ廻る素町人原が俗氣段々として天を蔽ひ、黄塵四方に塞つてつく息さへも苦し。

## 一の谷

中内義一

われ去歲の秋の暮、神戸より姫路に至ることあり。囊底輕きまゝに瀛車にも乗らず、勞を一双の鐵脚にかりて、孤筇の導くにまかせ、道一の谷を過ぐ。南は巨海漫々として、蒼波渺茫たり、漁父の船影漂々として、磯うつ浪は行きつ戻りつ。おぼろに見ゆる四國の嶋山、遠く彼方に聯りて、呼べば忽ち應へんとす。北は深山峨々として、青螺蜿蜒たり。藻鹽の煙片々として、浦吹く風に消上り。うすかに聞ゆる老猿の叫聲、凄く衙みひびきて腸をるる。われ徐るは當年の事を追想し、感慨胸に溢れて涙濺々。足自ら地に膠せられて茫然佇立、四邊の光景を眺めて嘆又嘆。憐を古城址の有様今如何に。昨日までは城廓廊櫓巍然として連なり、輪輿の美粲然として、見る人の耳目を驚かし、天晴名城の一つと數へられしも、今は蹤あし。昨日までは軍卒雲の如く霞の如く、劔戟つばあひの穗尖と連なり、此城と命と共にすべしと誓ひて、天晴無双の逞兵として知らまし城兵も、今は跡なし。遠く眼を放つて見れば、恨を結ぶ草離々として、當年の悲風長へに颯々たり。斷礎殘牆、青苔露滑々にして蟲聲唧々。燒灰焚土、累々丘を築きて鬼哭啾々。うたてや芒の穗尖空しく風に靡ひて、過ぎし日の物語せまはしげあると。梟、松桂の枝に哀を鳴き。狐、乱菊の下に人よ隱るゝあど。見るもの聞くもの一として、銷魂斷腸の種あらぬはあし。

憐む可き哉平氏の一族。生者必滅會者定離、何を遁れぬ浮世の常といひながら。昨日までは金殿玉樓、翠帳紅閨の裡に起臥して、凌羅錦繡の裝美を盡し、金鞍肥馬に跨りて、春花秋月の間に徘徊し、浮世の苦勞つゆ聊かも知らざりし貴公子が。うたてや、源氏のために世をせばめられ、住みあれし花の都を跡にして、茫々たる西海の波上に漂ひ。楫をまぐらの仮寢の夢さへ、噪禽の羽音、漕舟の櫓聲に破られて、片時たにも結ぶひもなく、蜻鼠膚を侵して、翠黛紅顔の色衰へ、哀れに陣ましさ様ありしを、幸に

して一時山陽に勢を挽回し、此處一の谷の城に籠りて、必死と拒ぎし勇戦も、甲斐なく散々に打ち破られ。兵燹忽ち廊閣を燒盡して、紀念に残るものどてなし。昔の跡を訪はんとすれば、風にうちづく篠芒、左らずば人の裳にまつはる萬藟のみ。城すら既にかくの如し、人は如何でか全からん。玉も死も一様に碎けて、幽魂長へに啾々たり。僅かに遁れて舟路に身を全ふせしものありしと雖、彼等は皆親を打たれ子を殺されしもの。あまなか生残つて悲嘆に沈み、間もなく西海の藻屑とありはてしにあらすや。

嗚呼此一の谷に於ける戦を想ふもの、誰か哀を催ふさるものあらんや。頃は是、壽永三年如月七日。修羅の活劇今や起らんとする前一瞬、天曉あらんとして夜未だ明けず、萬籟聲収まりて四隣寂寥たるのとき。西門櫓頭、嚟曉たる伎樂の調は、如何に東夷の心に哀を感せしめし乎。關東一の旗頭として、人に知らせし鬼武者が、一朝浮世の無常を悟りて、圓顯緇衣に姿を替しは、抑も何による乎。あはれ、須磨の浦風に果敢なく散りし苔の花。生田の森蔭に脆くも消えし若葉の露。想へばどれもこれも皆悲絶慘絶。涙益潸然として止め難く、銷魂斷腸の情愈よ禁じがたし。

惘然として大空高く打ち仰げば、夕暮の空に雲迷ひて、暝宿を急ぐ晚鳥け聲、啞啞と鳴くもうら悲し。秋風や浪にもまると平家蟹。

## 文苑

### 北遊日錄（承前）

秋月胤繼